

目的: 今日の多様化される「アート」の議論を理解し、  
それらがどのようにして今日に至っているのかを整理する

## 背景: 今日のアートをめぐる議論の複雑化

- 1990年代の「関係性の美学」の登場以降、社会と芸術がいかに関係しているのかについての議論が深化  
Ex. 批評家クレア・ビショップとグラント・ケスターとの対立: 芸術の「自律性」に関する問題



- これらの議論は、今日の日本におけるアート活動においても同様
  - 「地域アート」(藤田 2016): 芸術は単なる「町興し」でいいのか?
  - あいちトリエンナーレ「表現の不自由」展: 芸術は政治的な問題に積極的に関与すべきなのか?



- これらのアートを考えるために、
    - 20世紀より始まった「社会関与芸術(Socially Engaged Art, 以下SEA)」をめぐる論争史がどのようなものなのか?
    - SEAをめぐる論争史は、20世紀以降の現代美術史の議論とどのように関係しているのか?
- を考える必要がある

## 方法: 代表的文献の調査を通じた概念整理

- 現代アートに関する基本的な理解
  - 末永照和編『増補新版 20世紀の美術』、2018年
  - 小崎哲哉『現代アートとは何か』、2018年
  - 山本浩貴『西洋美術史』、2019年
  - アーサー・ダントー『アートとは何か?』2013年 etc



- 基礎理解をもとに、SEAを主題とした文献の読解を通じた批評マップの作成
  - Bourriaud, Nicolas., *Relational Aesthetics*, 1998.
  - Bishop, Clare, "Antagonism and Relational Aesthetics," *October* vol. 110, 2004, pp. 51-79. (16)
  - Keaster, Grant, "Another Turn," *Artforum International* vol. 44, 2006, p. 23-24. etc
- それに付随し、SEAの実践が行われている拠点調査
  - アーツ千代田3331(東京都)  
2017年に「ソーシャリー・エンゲイジド・アート展—社会を動かすアートの新潮流」が開催
  - アートアリアb1(大阪府)  
中之島を拠点としてアートプロジェクトを毎年開催

## 結果: SEAめぐる言説のマッピング

- ニコラ・ブリオー「Relational Aesthetics」(1998)
  - 1990年代の現代アートの高騰化に対する批判として、作家と鑑賞者との「関係性」に芸術的価値を置く(1)



• クレア・ビショップ「Antagonism and Relational Aesthetics」(2004):  
「関係性の美学」が「調和」と「統合」が前提となっていることを指摘し、不可視化されている「敵対」に目を向ける(2)



• グラント・ケスター「Conversation Pieces」(2004):  
「参加者」と「鑑賞者」の間にあるヒエラルキー(作家の特権性)を批判し、作品の作家性を否定  
ビショップの「敵対性」に対し、作家が前提となったエリート主義と批判(3)

芸術の「自律性」を重視  
: SEAは「芸術」として考える必要がある(モダニズムの考え)

芸術の「自律性」を批判  
: SEAは社会と関与するゆえ、従来の芸術の枠組みでは考えられない

↓  
芸術は制度・社会・主流の倫理から解放されなければならない

↓  
SEAは制度や社会的な貢献などから考える必要がある

- 論争の歴史的背景: モダニズムにおける芸術の自律性(1920~30年代)
  - 芸術を芸術たらしめる要素の追求
  - そのものの内容(社会的文脈)よりも、その形式の「美」を追求 → 表現抽象主義へ
  - 一方、自律的な芸術領域の存在を前提とするモダニズムに対する批判として、積極的に社会と関与する芸術が登場(1960年代に本格化→今日のSEAへ)



SEAは「アート」の価値が社会に左右されているのか否かをめぐる論争であり、その系譜はおおよそ100年以上前まで遡る(モダニズム、さらにはその以前のダダに至るまで)

参考: 各批評家が論考内で例示したSEA  
(作品の状況、解説等はQRコードを参照)

- (1) リクリット・ティラヴィツィ《無題1990(ハツタイ)》(1990)
- (2) トーマス・ヒルシュホルン《パタイユ・モニュメント》(2002)
- (3) スザンヌ・レイシー、アニス・ジャコビー、クリス・ジョンソン《屋上は燃えている》(1994)

